

SAGAMI VOICE

相模女子大学小学部
学校紹介通信

さがみの授業づくり

2023.3改訂

252-0383

相模原市南区文京 2-1-1

TEL.042-742-1444

www.sagami-wu.ac.jp/sho/



教員のチームワークで作る学校 Sagami Spirits

子どもたちの考える力をそだてる

よりよい授業のために、教員一人ひとりの教材研究は重要です。さらに、その教材研究を学年で力を合わせて行うことは、もっと大切です。「指導のねらい」「子どもたちに考えさせたいこと」「子どもの興味を高める方法」「提示する教材、教具作り」そんな観点を学年で相談しながら、授業準備をしています。

また、私たち教員が共通の授業イメージを持っているということも重要です。私たち教員の研究テーマは、「自ら考える子の育成」です。このテーマがもつ授業イメージは、例えば、「1枚の写真から、気づいたことを発表し、問い合わせを見いだし、子どもたち同士が意見交換や調べる活動を繰り返して、価値を見いだしていく。」このように探究的に学んでいく、そんな子どもたちの姿を引き出したいと私たちは工夫しながら授業作りに励んでいます。

教員が一つの目的に向かって、授業作りを進めていく、これがSagami Spiritsです。



相模女子大学小学部

Sagami Women's University Elementary School



つなぐ手の考え方

私たちは、子どもたちに、大きな夢をもち、その実現に向かって粘り強くチャレンジする人であってほしいと願っています。また、人々が志をもち、その実現に向けて努力しているのだということに気づき、応援できる人であってほしいと考えます。そして、お互いを尊重してよりよい生活をつくる心豊かな人になってもらいたいと思います。こうした願いから「つなぐ手の学習」は生まれました。現在は、4つの学習の柱を設け、年間30時間以上の授業計画を立てて全学年で実施しています。従来の教科学習では、学ぶことのできない子どもたちの生きる力を育む、相模女子大学小学部独自の学習プログラムです。保護者の方からは、「人間として生きていく力を養うだけでなく、子どもたちの大きな可能性を広げてくれるものだと感じました。」「親である自分も受講したいような学習内容だと思います。」という言葉をいただいております。私たちは、この期待に応え続けられるように、日々、実践と検証を重ね、「つなぐ手の学習」をつくりあげています。

つなぐ手の具体的な内容

1. 夢をつなぐ～志ある人と出逢い、仕事に学び、生き方を知る～

オリンピック体操競技の金メダリストである森末慎二氏をお招きして、子どもの頃のエピソードをお話していく機会がありました。森末氏は、ご自身がしてきたことをお話しただけですが、子どもたちは、おのずと自身の生活を振り返り、「あきらめずに、頑張ること。」「今できることをすること。」など大切なことを見つけ、気持ちを引き締めました。私たちの周りには、夢に向かって、いろいろな生き方を貫いてこられた方がたくさんいます。そんな方を講師にお迎えし、直接お話をうかがうことを大切にしています。講師の方の人柄、仕事に打ち込む情熱など、言葉で表現されない部分も丸ごと受け止めることで、普段の授業では得られない多くの学びとともに、少しずつ自分の夢や将来、自身のあり方を考えていきます。

2. 伝統をつなぐ～日本の伝統文化にふれる～

全学年で茶道体験をしています。低学年は、裏千家の正教授の先生と相模女子大学茶道部の学生に、心を尽くしたおもてなしをしていただきます。この体験を通して、誰かに何かをしてあげたいという気持ちが芽生えます。

学年に応じて所作やその心を学び、6年生では、お世話になった先生方をお客様にお迎えして、おもてなしの授業をしています。6年間の体験を積み重ねることで一人ひとりが「おもてなし」「おもいやり」の心を学びます。

そのほか、日本人としての豊かな心を育むために、書道、日本舞踊、落語などの講師をお招きし、実際に体験しながら、伝統文化と基本的な礼節や所作、日本人が大切にしてきた心遣いについて学習しています。留学やホームステイ、海外への旅行など、海外の人々との交流、異文化に触れる機会が増えると同時に、子どもたちが日本の文化を伝える機会も増えてきました。また、グローバル化の時代に生きる子どもたちにとって、芯をしっかりとつともに、日本人の心遣いを身に着けることが必要な資質と考えています。

3. 命と食をつなぐ～食と命の尊さを学ぶ～

3年生では、専門家をお招きして和食のマナーを学ぶ授業をしています。日本の伝統的な食文化と和食の関係や配膳が決まっている理由、季節を意識した食文化、作法などを学んでいます。健やかな心と体は、日々の食べ物から作られます。からだを作るために必要な食べ物のバランスについて、相模女子大学栄養学部の全面的な支援を受けながら、実習を交えて楽しく学んでいます。自分に合ったお弁当づくりや、バランスよく食べることの意義などを体験的に学ぶことで、自分の成長に適した食事をすることの大切さを学び、正しい知識と選択力をつけています。また、栽培学習や鰯の調理などを通して、自然界の命をいただくことへの感謝の心を育んでいます。

4. 心と心をつなぐ～コミュニケーション力の育成～

子どもたちがチームのメンバーと協力し、ピンポン玉を半分に切られたパイプの上に転がしてリレーをしながら、数メートル先のバケツまで運びます。ボールを落とさないように、夢中になって活動します。これは、コミュニケーション能力育成の授業の1コマです。

相手の意見をきちんと聞いて受け入れる。自分の気持ちや考えを言葉にして伝える。様々な活動の中で、今自分ができることを考え、行動する。これらは、子どもがのびのびと学校生活を過ごし、真っ直ぐ成長していくために大切なコミュニケーションの力です。毎日の学習や学校生活の中で、協力しながら課題を解決するため、大きな力となります。また、先に紹介した3つの柱の学習を通して心にまかれた種を発芽させ、自分の力として発揮できるようにするきっかけづくりにもなっています。グループゲームや話し合い活動、友達関係を考える授業などを中心に、学年に合わせた多彩なプログラムを実施しています。

SAGAMI VOICE
相模の授業づくり特集

ヤギの飼育に至るまで

小学部がヤギを飼い始めたのは、20年ほど前のことでした。当時始まった低学年の「総合学習」の授業で、ある学年が動物を飼いたいと言い始めました。「ウサギ」「ヒツジ」「馬」「ポニー」「オウム」・・・たくさんの候補が出た中、本で調べたり動物園に聞いたりして、「ヤギ」が浮上してきました。病気が少なく、あまりえさせがかからず、人に馴れやすいという観点からでした。

しかし、当初、ヤギを飼育することについては、教員の間で賛否両論がありました。生き物を扱う責任の問題、飼育場所の問題、その学年の子どもたちが卒業まで飼うのか、その後はどうするのかなどといった問題です。長時間にわたって話し合いが行われたのでした。

結局、2年生になったら総合学習の中で、ヤギについて学び、飼育を体験することにしました。小学部で学ぶすべての子どもたちに「動物を慈しむ優しい心を育んでほしい。」「命の大切さに気づいてほしい。」と願ってのことでした。

一方で、教員にも覚悟が必要でした。それは、2年生の学年担任まかせにせず、教員全体でヤギの飼育活動を支えていくと確認し合ったのです。

一つの教育活動を教員みんなで支えていく、これがSagami Spiritsです。



歴代小学部のヤギ

チャレット
パレット
メルル
モーチャン
ミルク
バニラ



終末を看取る教育

学園の人気者、ヤギのミルクが、平成26年の夏休みあけに、13年の生涯を閉じました。ミルクは、幼稚部から大学生まで、そして近隣の方達からも「ミルク、ミルク」と愛され、声をかけると、必ず「メェー」と返事をしてくれるヤギでした。

ミルクは、いつも子どもたちといっしょに遊んで、そばにいてくれました。夏休みが明けて登校してきた子どもたちの元気な声や姿を見て、ミルクは安心して、その時を迎えたのだと思います。亡くなつたことは、朝の全校放送で子どもたちに知られました。その場で、泣き出してしまう子、驚き、悲しむ子、言葉を失っている子、子どもたちにとって、「死」という言葉や、身近な人が亡くなる体験はほとんどなく、受け入れることができないようでした。いつもいるのが当たり前だったミルクの死は、ずっとお世話をしてきた子どもたちにとって、人一倍深い悲しみだったと思います。子どもたちから「ミルクはどうなるの」「お別れできる」「もう一度会いたい」とたくさんの声が聞こえました。

その日の午前中に先生方で祭壇を作り、その間に子どもたちはミルクと過ごしたことと思い出して、お手紙を書きました。お葬式では、1本ずつ献花をし、クラスごとに最期を迎えたミルクの顔を、しっかりと目に、焼き付け、お祈りを捧げました。そっと、顔をなでながら「ごめんね。ふざけて頭を叩いたりして、もうやらないから起きて・・・」と言って両手を合わせて、涙を流している子どももいました。そして、子どもたちの希望もあり、骨の一部を学園の百年桜のそばに埋めました。いつもミルクがいるはずの山羊小屋の前に立ち、手を合わせて涙を流している子どもの姿もありました。ミルクは、子どもたちに、命の尊さ、大切さを教えて旅立っていました。また、動物を最後まで責任を持って飼う事の大切さを教えてくれました。



教員研修、教材研究

「考える力」を育む授業づくりを目指して

私たち教員は、日々、子ども達の「考える力」を育む授業づくりに力を入れています。相模女子大学小学部では、「考える4段階」をイメージした授業づくりを行っています。「考える4段階」とは、①課題が生まれる「考えをもたせる」段階→②解決への見通し作り「考えを出させる」段階→③有効性の検討「考えをつなげる」段階→④一般化し次の課題へと向かう「ねりあげる」段階をさします。

まず、私たちが授業力につけるために、全教員が年間一回「公開授業」を行っています。授業を参観し合い、教員の授業力向上と授業づくりの共有化にむけての意見交換を積極的に行っていきます。

次に、年間4回の「研究授業」では、専任教員全員が一同に授業を参観して、意見交換を行います。授業のねらいや子どもたちの言語活動の充実などを話題に、子どもたちの「考える力」が育まれる授業づくりの研究を行っています。この公開授業では、外部から講師を招き、指導もしていただいている。教員同士が授業を公開して参観するのは、緊張します。しかし、教員全員が実際の授業を通して学ぶことで、机上の空論ではなく、子どもが学ぶ姿から授業力向上のヒントを見出すことができる貴重な機会となっています。

また、2017年度から始まった「プログラミング」授業についての研修会も行っています。川原田副校長を講師として、授業形式の研修会を行い、教科のねらいや子どもたちの学習活動のアイディアを学んでいます。

さらに、夏季研修や春季研修として、日頃の実践をレポート発表し合い、意見交換も行っています。2017年度は、目指す子ども像である「自分からできる子」への先生方の様々な取り組みがレポート発表されました。この研修会の中では、同じ私学のベテラン教師を講師に招き、子どもとの向き合い方や保護者との関係づくり、活力のある学校づくりなど、様々なアドバイスを伺う機会も設けています。

このように、スクールコンセプト「毎日会いたい友だちがいる 毎日受けたい授業がある」小学部の実現にむけて、私たち教員は、目の前の子ども達を常に見つめながら、そして、教員同士が互いに刺激し合いながら研修研究を日々行っています。

自分からできる子

私たちの学校、相模女子大学小学部は、子どもたちにとって、自分らしさが發揮できる居心地の良い学校であってほしいと願っています。そこで、私たち教員が、「相模らしい子どもの姿」について議論を交わし、導き出したのが、「自分からできる子」という子ども像です。そして、この目指す子ども像は、Sagami Vision2020という取り組みとして、相模女子大学小学部で行うすべての教育活動で意識する目標となっています。

取り組みは、日頃の生活改善から始まります。挨拶を推進して、子どもたちが自分から声を出すようになってきました。さらに整理整頓や授業準備を時間を守って行うようになってきました。

子どもは、失敗することもあります。そんなときも、自分から失敗したことを受け止め、次に活かすようになってきています。この変化を支えているのは、帰りの会で行っている「ふり返りカード」の取り組みです。子ども達が、一日の学校生活をふり返つて日記を書きます。この日記には、頑張ったことや失敗したことが素直に書かれています。友だちの活躍が書かれていることが多いのです。そんなときは、学級通信で紹介することもあります。子ども達にとっても、私たち教員にとっても、この日記から学ぶことがとても多いと思います。

そして、この取り組みによって、子ども達の声が、教室にたくさん響き渡るようになってきました。自分たちのクラスをより良くするために、進んで係活動を行ったり、友だちとのコミュニケーションをとったりしています。5、6年生による児童代表委員は、よりよい学校のために様々なアイディアを私たちに発信し続けてくれています。このアイディアも、児童代表委員の子ども達の自分からのアイディアです。

このように、子ども達の学校が、子ども達の手で動き出している姿は、とても輝いてみえます。そんな生き生きと頑張っている子ども達の姿を見て、「自分からできる子」は、これから時代にこそ、目指す子どもの姿なのだと思います。

副校長
VOICE



「つなぐ手」の由来

小学部独自の学習の時間である「つなぐ手」。このネーミングは、小学部が創立30周年まで5年ごとに発行していた全校文集の名前を引き継ぎました。

子どもたちが手を取り合って自分たちの生活をよくしていくこと。伝統文化を大切にしている人々や志をもって生きている人々から、自分たちがそんな方々の思いを受け継いでいくこと。そういう学習にふさわしい言葉と考えたからです。